
『フタガミ☆ダブル』

珊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『フタガミ☆ダブル』

【Nコード】

N4882P

【作者名】

珊

【あらすじ】

平凡な中学生 双神想介（ふたがみそうすけ）。ある日彼はもう一人の自分を見てしまう。ドッペルゲンガーという名らしいその怪奇現象を解決するために動いてくれたのは——想介の気になる女の子！？

いつかのジャンプの読切をどうしても続きが書きたくなったので連載してみることにしました。1、2話は読切の内容そのままの予定ですが、それからはしっかり考えていきます。

第1話 もう一人（前書き）

読切まんがの内容を小説化しただけです。

今のところ1／2

頑張っていきますのでよろしく願います。

第1話 もう一人

フツーに毎日学校に通って。

クラスに気になる女の子がいて。

でも別にその子と仲良くなる特別なイベントが起こるわけでもなく、

放課後は友達とバカな話をしながら家に帰る。

オレ、ふたがみそうすけ双神想介の中学生生活はこれからもこんな感じでフツーに過ぎてく。

———そう思ってた。

「ただいまー」

いつも通りの放課後、異変を知らずに想介は玄関のドアを開いた。

「あれえー、想介!？」

いつの間にでかけたのー? さっき自分の部屋にいたのにー」

想介を迎えたのは二つ年上の姉。

常にひらひらとした服を着ているせいか、あるいはその真ん中でふわふわした髪を分けた幼い顔立ちの所為かはわからないが、いつも妹と勘違いされる姉が不思議そうな顔で想介の顔を見るなりそう言った。

「は？」

何言ってるの？姉ちゃん：

今学校から帰ったんだぜオレ：

「え—————！？」

うそ—————っ！？

確かにいたって！」

わめくとさらに幼く見える姉を「はいはい」とあしらって自分の部屋に向かう。

「：ったく姉ちゃんては何寝ボケてんだか：

そう呟きながらドアノブに手をかけたところで、真後ろの気配に気がつく。

「母さん？何でそんな真っ暗なところに：

今日—————」

雨戸を閉めて暗くしてあるところに母親がいるのも変な気はしたが、いつもの通りの親子の会話を始めようとしたところで、それが母親でないことに気づく。

部屋の暗闇に立っていたのは、やたらと昏い^{くら}目をした

———^{オレ}双神想介、だった。

「…何だったんだアレ…

すぐ消えたし…

疲れてんのかなーオレ…」

学校の席———もうすでに半ば自分の巣となってしまうた席に座りながら呟く。

「おい想介!」

「…?」

不意にかけられた声に振り向くと、そこには不良風な——しかもチヨビヒゲと学校に丸のサングラスをかけてくるというギャグだとは思えないキャラー——小太りの男と、髪を染めた背の高い想介よりも少しがっちりした少年が立っていた。

否定したくなることも多々あるが、想介の友人である。

なぜか二人は二人は険しい顔をしていたが、その原因はすぐに彼

らの口から飛び出した。

「てめー昨日オレらが声かけたのに何でシカトしやがったんだよ！
」

「!？」

想介に勿論覚えはない。

続いて彼らは状況を話した。

当然、それは想介の知らないものだった。

「…は？」

昨日の夜オレが駅前を歩いてた!？」

眉を寄せて一瞬逡巡したあと、すぐさま答える。

「人違いだよ。

オレ、昨日はずっと家に居たって」

「とぼけんなよ、誰がどーみてもおめーだったぞ」

そこに更なる追撃が重なる。

「あたしらも見たよ——」

目を向けると、クラスメイトの女子がこちらを見ながら続けた。

「街で双神がぼーっと歩いてるところ!」

その言葉に、悪友たちは一瞬間をおいて陰しさを増した声で言う。

「てめーやっぱり!!」

「わーっ

な、何かの間違いだって!!」

「……………」

想介はまだ知らない。

そんな一見バカなやりとりに耳を傾ける少女がいることを。

「じゃー何か？

ドッペルゲンガーとでも言う気かよっ」

「ド…ドッペル!？」

「……………!!」

昨日の『アレ』を思い出す。

このやりとりは始まったホームルームによって一旦治められた。

『ドッペルゲンガー』

「ダブル」とも呼ばれるもう一人の自分を目撃してしまう怪奇現象。もう一人の自分を目撃した者は死ぬと言われている。

「はあ？」

朝の掃除の時間、ホーモルーム直前に言われたことが気になって携帯で調べてみれば、この結果である。

『アレ』の異様さを思い出し、わずかに冷や汗をかく。

「ま…まさかな！」

見間違いだよきっと!!」

「……」

何を見たの？双神くん」

「ギャ――――――」

半ば、というよりほぼ10割方自分に言い聞かせるために言った言葉に言葉が返ってきたことと、耳元で不意に囁かれた声に、想介は声にならない声を上げて尻もちをついた。

そして顔を上げたところで今度は心の中でだけ声を上げる。

――――――雨音 あまね 結花 ゆか!!

色素の薄い髪にいぶかしげな瞳。

普段から無表情なクールビューティを崩さない少女。

そして何より…想介の気になる——気になる、女の子だった。

「雨音!？」

思わず口に出してしまいながら、戸惑う。

——話しかけてきた!？今までまともに話した事もないのに
何で…!？

撥ねた心臓の音を聞きながらそんなことを思う。

そんな想介をよそに彼女は感情を表に出していない声で言った。

「見たのね?自分を」

「へ…何…?」

突然のことで間の抜けた表情をさらしてしまう想介。

もっともそんな表情をさらした理由はそれだけではないのだが。
そんな想介に少女は再び言う。

「もう一人の自分、だよ!」

「……」

…見えた!」

尻もちをついて座り込んでいる想介に制服で規則である膝上スカ
ートの結花が近付いたらどうなるか。

「…!」

それに気がついた被害者の少女は迷いなく強力な足蹴を叩き込んだ。

バキッ

——ケ：ケリ入れやがったッ：

「そう…やっぱり見たんだ…」

鼻に走る独特の熱さと痛みに悶絶する想介に目を向けずに、それでも変わらず淡々と雨音は言った。

「クラスの人達の話から考えると間違いなさそうね…」

「……？」

想介はその言葉に疑問と、それから寂しさを覚えた。

クラスの人達…そう言った中に、雨音が含まれていないような気がしたからである。

「わっ」

不意に、雨音が相も変わらず座り込んだままの想介にしゃがんで近寄る。

出てしまった声とともに再び撥ねた心臓を抑えつけようとする想介に言い聞かせるように雨音が言った。

「いい？」

双神くんが見たのは『幻人』^{イド}

キミ自身の残留思念の集合体！」

「!？」

イド：「？」

キスさえできそうな顔の距離に、どぎまぎしながらオウム返しに言う。

「そう…」

生霊や幽霊：ドッペルゲンガーと呼ばれる現象の正体でもある」

雨音は更に続ける。

「人は常にさまざまな思念を周囲に発散して生きてるわ。

それらは残留思念として本来なら時間が経てば消えていくもの…。

でも…：ごくたまに密度の濃い残留思念が消えるどころか具現化し、形を持ってしまう事がある。

…それが「^{イド}幻人」

「^{イド}幻人は多感な10代の時期に最も生まれやすいってデータもあって…」

「お…おいおい雨音!？」

想介は失礼ながらも、否、当然の反応として考える。

…何だ？空想癖でもあるのかこの娘…

それが表情に出る前に慌てて手を顔の前でぶんぶん振りながら言う。

「ワ、ワリーけどオレ普通の人間だぜ？
そんな分身の術みたいな能力あるわけないって」
チカラ

「……………」

………
あるのが普通なんだよ。

人の思念にはそれだけの影響力がもともとある」

雨音はなぜか水の入ったバケツに手を翳しながら言った。

「強い想いが自分の平均以上の身体能力を発揮することもあるし…
不治の病を完治させた例だってある。

そして……………」

言葉を切ったところで変化は起こった。

バケツの中の水がゴポツとわずかに音を立てて雨音の手に導かれるように空中へ昇ったのだ。

「み、水が!？」

お約束のように目を丸くする想介に雨音は淡々を説明する。

「水に私の思念を送り込んだの。

強力な思念は物理法則さえねじ曲げる事ができる」

そして歪な楕円形となった水を数秒フワフワと浮かせたあとバケツに音も無く戻す。

「ま…ここまでできるようになるにはそれなりの訓練が必要だけだね」

もう想介にはひたすら驚きしかなかった。

「あ…雨音…

お前…何者…?」

「私の事はあと!

のんびりしてるヒマないよ、双神くん」

想介の驚きと疑問を華麗にスルーして、想介をびしつと指差すというポーズを決めてクールビューティの彼女は言った。

「学校サボり決定!!」

「…は!?!」

第2話 覚醒

「もう一人のオレを…捕まえる!？」

学校を抜け出して最初に雨音が言った言葉を繰り返す。
そう、と小さく肯定する雨音。

「^{イド}幻人は基本的に本人が行った事のある場所だけをさまよう意思のない人形。

そして本体である人間が触れると途端に分解して消えてしまう…。
メンドーな事になる前に捕まえなきゃね」

「……………」

有無を言わさない言葉に、想介は頷くしかなかった。

「この辺りはオレの行動範囲だけど…」

いつもの街の風景を、いつもの調子でないまま歩く。

「ふーん。この近くにはいないみたいね。
それらしい気配も感じないもの」

「————マジでどーゆー娘なんだ？ 雨音結花…
今まで「可愛い娘だな」くらいの認識しかなかったけど…。

「ちょっと！」

雨音の真剣さに対して失礼な考えを抱いた想介に————声をかけられた中には勿論雨音も入るのだが————当然の聲がかかる。

「そのカップル！学校はどうした！？」

「————カ、カップル！？」

不意の声に跳ね上がりながら声のした方向を向くと、そこにいたのは紺色の制服の国家公務員————警察官だった。
運悪く交番の前を通ってしまったらしい。

「やべっ、逃げろ！」

「こら！待ちなさい！！」

さして気にした様子もない雨音の背中を押しながら想介は逃げ出した。

しばらく逃げ、上に電車の通るトンネルにさしかかった。
その場所はトンネルというには余りに短いものなのだが。

「ハア、ハア…び、びっくりしたな…」

考えてみたら制服だし目立つよな！

ハハ…」

走ったことが原因ではなく変な汗をかきながら言う。

しかし雨音は何も答えない。

「あ、雨音…？」

———げっ、もしかして気を悪くした？

「…そんな風に見えちゃうんだ…」

「えっ」

珍しく、とても驚いたような表情をした雨音に思わず聞き返してしまう。

「な、何でもない。早く行こ！

時間がないんだから！！」

早足でトンネルの中に入っていく。

その頬に朱が差しているように見えるのは気のせいだろうか。

「…なあ。

時間がないってどういう事？」

トンネルの半分ほどにさしかかった時に想介が言った。

「…幻人が『闇堕ち』^{ネガお}するの」

「ネガおち？」

聞きなれない単語をオウム返しにする。

雨音は想介の方を見て頷く。

「幻人はむきだしの思念体。放置されているうちに世の中にあふれる人の恨みや憎しみ…」

そういった強い『負』の残留思念の影響をうけて少しずつ闇に染まっていくの」

そして完全に染まりきった時…

それが『闇堕ち』^{ネガお}

闇堕ちした幻人^{イド}は意思を持ち本体である人間を殺そうとする…！！

どこか悲痛な表情を浮かべつつ目に強い光を宿しながら言う。

「本体を！？」

な…なんで…」

尋常ではない雨音の言葉と気迫にびくつきながらも言葉が口をつく。

想介の言葉に雨音は絞り出すように言った。

「その人間になりかわって…」

唯一の存在に、なるため…！！」

私の兄は5年前…闇堕ちした自分の幻人に殺された…

堪えきれなかったように小さくポツリを呟く。

「もうあんな思いはイヤ…。

だから私は……」

「雨音…」

想介には、それが彼女が笑わない理由に聞こえた。

それが彼女がこんなにも必死になる理由だとは分かった。

続けて何かを言おうとしたところで雨音がピクンと動き、こちらを勢いよく振り向く。

その手には———

「!? 水鉄砲!？」

水鉄砲が握られていた。

小さな男の子が喜びそうなそれをこちらに向ける。

そして…撃つ。

「!!」

「ギッ」

鉄を斬る機械のような超高压水流のビームが撃ち抜いたのは、想介の首筋に伸ばされていた手だった。

「双神くん、私の後ろへ!!」

雨音の言葉に、頷く余裕もないまま彼女の後ろに回る。

そして振り向いた想介の目に映ったのは——『双神^{じぶん}想介』。

————本当にいた!! もう一人の自分^{オレ}……!!

で、でも……

黒い……!?

想介の目に映ったのは、確かに自分。

制服を着てこそいるが、それはまるで写真のネガのように異常に黒く、黒く、染まっていた。

目だけに異常な光を灯しながら、そいつは一瞬動きを止める。

「……闇堕ち……!!」

水鉄砲で撃ち抜いた箇所が闇で埋まっていくのを見ながら雨音は
呟く。

「コ……殺ス……」

双神、想介ハ……オレ一人ダ……」

「!!」

異常に歪みのかかった声で、そして恐ろしいことに自分の声だと
わかる声で言ったそいつにゾクリと背中を震わせる。

「……大丈夫」

想介に、あるいは自分に言い聞かせるように雨音が言う。

「双神くんは…私が守る!!」

言葉と同時に水鉄砲の補給口をピン、と弾いて開けると、想介の前で一度やって見せたように水を導く。

ただしそれは、歪な球体ではなく鋭い曲刀。
ゲームでよくある、シラムシールという名の剣はシャン、と美しい音を立てて顕れた。

続けてありえないことに、雨音は想介の身長の2倍以上の高さに――跳んだ。

「自我がめばえた幻人を消す方法は一つ!! より強い思念力による…破壊!!」

空中から鋭く閃いた水のシラムシールは黒い想介の喉元を切り裂く―――かに見えた。

「ッ!？」

飛来した何かにシラムシールを弾かれ、雨音が地面を摺りながらこちらに戻る。

―――まさか…

雨音は最悪の可能性を考える。

「こんな所で同胞なかまの誕生に立ち会えるとはな…」

カッン、カッンとヒールを鳴らしながらトンネルの中を歩いてく
るのは髪の長い、OLらしい恰好をした大人っぽく美しい女性だっ

た。

ブランド物であろうハンドバッグを携えたその姿は、普通の女性にしか見えない。

黒いスーツから覗く左手があふれだすような淀んだ闇で作られていなければ。

「な!？」

———マズい…! あんなのが近くにいたなんて…

突然の乱入者に驚きの声を上げる想介とは対照的に、雨音は逡巡する。

そして雨音の方を睨んだ女性は変化を見せる。

「小娘…キサマ…退治屋か…」

ピシ、パキ、と音を立てて女性の顔の左半分が崩壊し、同時に右目が黒く変わる。

女性の崩れた左側からあふれだす闇と、そこから覗く眼光の禍々しさは黒い想介のそれをはるかに上回っていた。

「いいっ!？」

な…なんだあの人!？」

「人じゃない…あれは幻人^{イド}…!」

近づいてくる女性、いや幻人を油断なく見つめながら雨音が言った。

「本体を殺し、その人に代わって社会に紛れこむ事に成功した：『闇堕ち』のなれの果て：！！！」

「！！」

驚きを隠せない想介を余所に、幻人は動いた。
大きな影とな歪んだ腕を閃かせて雨音を襲う。

「くっ」

一撃では終わらず、二、三、四撃と繰り返される影の一撃を結花はかろうじてシヤムシールで防ぐ。

「さあ同胞よ。^{いっぴい}手伝ってやろう」

腕が完全に闇と化し、顔もヒビだらけにして闇をあふれさせながら、余裕を感じさせる声で幻人は言う。

「本体を殺せ！！」

そうすればさらに頭がスッキリするはずだ！！人を超えた新たな存在として！！」

「！！」

何も反応できない想介に、黒い想介が近づく。

そんな想介たちを横目でとらえながら、雨音は焦る。

———この幻人：精神的にかなり成長してる。人間に化けてどれだけ生きてきたの：！！？

——倒すには手持ちの水じゃ足りない…移動しなきゃ…
——でもこのままじゃ双神が…！！

「水使いの退治屋か…」

幻人は言う。

もはや幻『人』と言うのすらはばかられる気配をまとわせながら。

「退治屋…『思念体』を操り幻人を狩る忌まわしい者達…。

我々はただ『食事』をしているだけだというのに」

「知ってるよ！

人を襲ってその精神を喰べるんでしょ！？

その思念体^{カラダ}を、維持するために…！！」

またしても人間離れた動きで壁に着地しながら雨音が叫ぶ。

「年間の突然死…

行方不明者…

そのどれだけに幻人が関与していると思う！？」

「興味ないな。人間^{エサ}の話など」

すぐさま言った幻人の言葉に、雨音はギリ、と奥歯を噛む。

続けて懷から手の平に収まる程度の小瓶を取り出すと、ピンと弾いて開ける。

「だから幻人^{あんなたち}は…敵なの…！！」

雨音が言葉と同時にシャムシールをもったままの右手を振ると、

小瓶の水が四方手裏剣に形を変えて飛来する。

「!!」

その攻撃に幻人がひるむ。

「双神!! 逃げて!!」

「!!」

「早く!! 二体の幻人相手じゃキミを守る自信ないから!!」

「で…でも…」

———女の子を…雨音を…一人置いて逃げろってのか…!?

『もうあんな思いはイヤ…』

雨音の言葉が頭をよぎる。

———いいのか…? 男として、それで…!

そこまで考えたところで、視界の端に黒い何かが映る。

「!!」

ズダン、と大きな音を立て、首を締めながらトンネルの壁に想介を縫い付けたのは黒い想介だった。

女性型の幻人を見て学習したのか、その手は大きく歪に形を変え

ている。

「ちょ・・・何で逃げないの――!!」

雨音は慌てた様子で叫ぶ。

「ん・・・な事、言ってたって・・・」

想介は足がギリギリ地面につかない高さに縫い付けられているが、締まる首の苦しさを無視して言う。

「オレのために闘ってる雨音を放つという・・・一人だけ逃げられねえって・・・」

「!!」

なぜか顔を赤くする雨音。だが、状況を正しく理解している彼女は続ける。

「バカ!! そんな場合じゃないでしょ!!」

私の事はいいの!! 私は幻人を倒すのが仕事で・・・はっ」

何かに気づいた雨音が反応するが、遅かった。

幻人の腕がついに雨音の胴体を捉えて持ち上げる。

「!! 雨音!!」

「くくく・・・このまま骨を砕いてやろう・・・」

メキメキを雨音の体が軋む。声なき悲鳴が彼女の口から漏れる。

「や、やめろ!!」

——くそ! オレの所為でさらにピンチじゃねーか!! この
ままじゃ雨音が……

——雨音が…殺される……!!

「ど…どけよっ」

想介は黒い想介しゅんに呼びかける。

——てめーは、オレの思念から生まれたんだろ!!

「だったら…」

お前も…双神オレ想介だろ!!

——「双神くんは、私が守る」

雨音の声が聞こえて…何かが切れる、音がした。
それでも…想介は言う。

「…なら、貸せよその力!!」

雨音結花を…守るんだ!!」

「!？」

自分の体か…あるいは黒い想介か…どちらかがそうなのかはわからなかった。

ただ、自分が光っているのはわかった。

それだけは、わかった。

「ガ…ア…ア…」

ズズズ、と自分の幻人から闇が退いていくのがわかる。

「まさか…」

雨音が胴体を捉えられたまま呟く。

———双神の強力な思念が…闇堕ちした自分の幻人を浄化していく…!?

「しかもそれだけではない…。あの人間…まさか…!!」

ここで初めて女性型の幻人が焦りを露わにする。

しかし、想介はそれを見ていなかった。

頭の中には一つしかなかった。

自分の首にかけていた手を離し、崩れ落ちる自分の体を見ながら言う。

「雨音を、離せよ」

———双神の意識が…イド幻人の身体に移った!?

雨音も驚きを露わにする。

姿は確かに想介だったが、その体は制服を含めてわずかながらも

発光し、髪も明るく色を変えて少し逆立ちながらなびいている。

「…バカな…。」

非力な人間の小僧が…幻人を支配し操る程の思念力を持つというのか…!!」

そんなことは…許さん!!

言葉とともに雨音を捉えていないほうの腕…左腕を振るう。

「……………」

ヒュ、ヒュヒュと。

地面を削り、壁に刺さる影を想介…ただしくはその幻人が避けていく。

その動きにも表情にも危ういところは一つもない。

「!!」

———疾い!! なんて動き…そうか…

雨音は呟く。

———^{イド}幻人は思念体…想いの強さがそのまま『力』になる。
———つまりこれは…双神^{こしこう}くんの…精神の力!!

その言葉を紡ぎ終わった瞬間に、想介の拳が幻人の脇腹を捉える。見た目は中学生の腕。しかしそこに宿る力は…間違いなくこの幻人を超えるもの。

「ぐあああッ…」

———このダメージ…なんだこの思念力は！？まともに闘えば消される！！

「…ならば」

想介が追撃を加えようとしたところで、幻人は一步引くと、左手を自らの体の前に翳す。

「ここは一つ！人間らしい事をやってみるとしようか！！」

「！！ 人質…！！」

そう、その左手には雨音が捉えられている。

「さあ…この状況でも私を攻撃できるか？くくく…」

「てめえ…」

奥歯をかみしめる。

「……………いいよ」

それが何を意味するか、わかっていたのは雨音だけだった。

「私の全部…預けるから。」

双神くんなら…信じられる」

——雨音…。

ぎこちないながらも、笑顔を浮かべて言う彼女の名前を、想介は心の中でだけ呼んだ。

「……わかった…」

「!？」

信じてくれ…雨音結花!!

地面を勢いよく蹴る。

迫る想介に、ようやく幻人は意味を悟った様だった。

「!!! 貴様…小娘ごと私を破壊する気か!!!？」

———実体じゃなく、思念体。この身体が『想い』を力にできるんならできるはず!!!

「————雨音を!!! 助ける!!!!」

先ほどとは比べ物にならない一撃。

拳とは思えない威力を持つ一撃が炸裂する。

「バ…カ…な…」

そう呟いた幻人の、想介の拳が貫いた部分から闇がどろりと漏れだす。

「こ、小娘の身体をすり抜けて…私にだけ攻撃を…」

言葉通り、雨音の身体には傷一つなかった。

胸の真ん中を貫いた手は一度非実体化し、幻人の身体だけを貫いた。

このからだ
「思念体にそんな使い方が…」

おの…れ…」

その言葉を最期に、幻人は音もなく消えた。
まるで最初から存在していなかったように。

まるでその存在のすべてを否定されるように、消えた。

「助けるつもりが、助けられちゃったね…。
ありがと…双神くん…」

その状態のまま、まるで抱きつくような状態になった雨音は、それでも想介に身体を預けつつ言った。

想介は小さく頷く。

「…!?!」

結花が不意に反応する。

「あっ」

「……………!?!」

想介の手は結花の胸をもんでいた。

「わ、悪い!!手を戻そうとしたらちようどベストな位置に………」

幻人の身体とはいえ、その手を開いたり閉じたりして見てしまうのは仕方のないことだろう。

雨音は思う。

——コイツ、台無し…。

翌日。

「え————っ!?!?」

想介の叫び声が屋上に響く。

「オ：オレも退治屋になって幻人^{イド}と闘えって!？」

「そう！世の中には昨日襲ってきたヤツみたいな幻人がまだまだ潜伏しているわ」

あれからまた感情をなくしてしまったような声で雨音が言う。

「君には幻人をもう一つの身体として操る能力^{ちから}がある。能力がある人がみんなを守るのは当然でしょ？」

「ジョ、ジョーダンじゃねーって」

想介は逃げ出した。

「あれ、いいの？」

しかし止められてしまった。

「私の胸触った事クラスのみんなにバラしちゃっても———」

想介は固まる。

あれは幻人の身体だったからノーカンだ：なんて事は口が裂けても言えない。

「：一緒にがんばろ？
双神くん！」

そのハートにふさわしく、想介が見た中でも一番の、そして本当の笑顔で、雨音は言った。

双神想介14歳。

そうやら普通の中学生生活はもう過ごせそうにない…

第2話 覚醒（後書き）

次回はキャラ紹介の予定。

一応主人公の力について作者なりの解釈をば。

その後からオリジナルです。

キャラクター紹介

双神 想介 ふたがみ そうすけ

主人公。一人称はオレ。

14歳 中学2年生

幻人^{イド}を自分の身体として操る能力がある。

予定としては他人の幻人にも効く能力で、そうすると他人の記憶や想いが流れ込んでくる。↑これ勝手な解釈。

それを利用して他人をばんばん助けていく予定。

読切では能力がないと思っている内からヒロインを助けようともがくなど、お人好し気質。

単細胞なだけかもしれないけれど。：失礼しました。

雨音 結花 あまね ゆか

ヒロイン。一人称は私。

14歳 中学2年生

自分の思念を水に送り込んで形、硬さ、などを操作して武器にする幻人の退治屋の少女。

主人公の事を呼ぶ時は双神くん。だがなぜか思考の中では双神。

ここから昔何かの接触があったと考えるみたりする。↑これも勝手な解釈。

無表情、というか感情を前に出さない少女。

読切の時の作者のコメントにヒロインがもう一人ゝみたいなコメントがあったのもう一人出す予定。

小太りちょびヒゲサングラスと長身髪染めの悪友は出すかどうか不明。
頑張りますのでよろしくお願いします。

第3話 仮の名は撫子

「むっ……………」

「……………」

「……………」

「……………ぶはっ」

想介は止めていた息を大きく吐き出す。
必死であの時をイメージしながらやってみたが、目を開けても特
に変化はない。

「…なあ雨音、これほんとに意味あるのか？」

想介は目の前の少女に向かって言う。

「うーん、やっぱりキミの幻人^{イト}が傍にいないと駄目なのかしらね」

顎に人差し指を当てて首を傾げる様子はとても可愛らしいが、こ
のままでは日が暮れるまでここ——放課後の屋上にいる羽目にな
る。

「あ、雨音はどんな風に訓練したんだ？」

「私？ 私は…えと……………その……………オモイダスノモオソロシイトオモ
ウクライニ…」

「ごめんもういい」

どこか片言で言い出した雨音に恐怖を覚えた想介は慌てて遮る。

そう？と一度聞き返してから雨音は一度言葉を切る。

「とにかく双神くんの能力を自由^{ちから}に使えるようにするのは急務ね。
…私から言えるのは、思念を使うためには言葉や頭で理解するんじゃない、体得する必要があるって事だけね」

「…思念を、体得…」

噛みしめるように繰り返す。

雨音のやって見せた水のシャムシール、そして手裏剣。

あんな事がいつでもできるようになるのだとしたら。それで恰好よく雨音を助けることができるようになったら。

「…双神くん？何ニヤニヤしてるの？」

「な、何でもない！」

雨音に顔を覗き込まれ、慌てて引き締める。

「ならいいけど…。双神くんはこの後ヒマ？」

「この後？…ヒマだけど」

「じゃあ私に付き合ってくれない？ちょうど買い物したいものがあるってさ」

「そ、それって…」

デートって言うんじゃない。

その言葉を飲み込む。雨音の表情が真剣なものに変わったからだ。

「気になることもあるから気は抜かないで置いてね」

「う、うん」

「じゃ、いこっか！」

「ちよっ」

手を掴まれ、思い切り引っ張られる。

わたわたするばかりの想介を見て、雨音が噴き出す。

「あのなあ…」

「あはは、ごめんね？こんな感じ初めてだからさ、すごく楽しくって」

そのはにかむような笑顔に感動する前に、少し胸が痛くなる。

——「初めてだから」

その言葉の裏には、幻人と闘い続けてきた、そして戦い続けている彼女の傷が隠されているからだ。

「……………いくよ、双神くん！」

「りょーかい！」

勢いよく返事をして、想介は顔を上げた。

「んー…ね、これどうかな？」

雨音が想介の目の前に差し出したのは女の子らしい桜色の花柄のハンカチ。

「うーん…えと、い、いんじゃないか？」

しどろもどろに答える。

「もー、ちゃんと見てるの？」

「み、見てる見てるっ、ちゃんと見てるから！」

そのしどろもどろさは明らかに自分の有罪を主張している。

だが仕方のない事でもあった。対女の子経験値の低い想介が雨音と一緒にこのような店——内装から女の子らしく、それに見合

った商品しか置いていないガールズショップに入っていれば当たり前だ。

他に想介達のようなペアは見られず、ちらほらいる女の子達から好奇の視線を向けられる。

気恥ずかしいことこの上ない。

「ん…まあ、いっか。じゃあ私会計してくるね。先に外出てて」

ここには居ずらいでしょ？

そう続けた雨音に、わかってたならもうちょっと早くしてくれ…などと文句をのたまう度胸も無く、すごすごと店の外に出た。

店の前で自分が一緒に帰れないことを告げた時にニヤニヤしながら了解した悪友達にばったり出会った。

「「…ニヤ」」

「……………」

二人揃って同じ様に笑いを浮かべる二人に想介は顔をひきつらせる。

「なんだなんだ想介？もう雨音にフラレたのかー？」

長身髪染めの小原おばらが言う。

「まあやっぱり想介には彼女は早かったってとこだなあ？俺らより早く彼女なんか作るからそんな事になんだよバーカ！」

と続けたのは小太りちよび髭サングラスの高峯。

「……………」

ひどい言われ様である。本当に想介が雨音とそういう状況になっていたらそれこそ心が折られているような言葉だ。

「ちげーよ、雨音が会計してんのを待ってんの。つーかまず付き合ってもいない」

げんなりしながら言う。

「なんだよつまんねー。もしそうなら慰めてやろうと思ってたのによ」

「男に慰められる趣味は無いし、むしろとどめを刺される気がするからこの先機会があっても遠慮する。

…つーか、なんでこんなところに？」

小原に問いかけると、なんだ知らねーの？と不思議そうな顔をされる。

「何を？」

「今日このへんでテレビの収録やるらしいぜ？撮影は夜かららしいけど生放送でやる番組のをよ」

そう説明したのは高峯。

「収録？どんな番組？」

「は、それも知らねーのかよ。

…霊能力者の番組だよ、可愛い女の子が出るらしいから張っとこ
うと思ってよ」

鼻で笑った小原が言った事とは、要は張り込んでその可愛い女の子
超能力者の顔を生で拝んでやろうじゃねえかなどという事なのだ。

「…お前ら、ほんとヒマだな…」

思わず一步引きながら言う。

「ああ？てめえみてえなりア充が言うんじゃないよ！」

「雨音とイチャイチャでもしてろボケ！」

目の色を替えた二人は捨て台詞を残して消えていった。

どうせなら代わってくれ、幻人なんてのと闘うつー使命なんて
のも含めて。

そんな言葉の代わりに溜息をついたところで肩をちゅん、とつつかれる。

「…？」

振り向いた時に想介は疑問符を浮かべる。

想介の肩をつついたのは雨音ではなかったからだ。

肩甲骨を超えたあたりまで流れる黒髪、それより深い闇色のどこ

か不思議な光を湛えた大きな瞳。

服装は黒一色ながらも、女の子らしさの出る私服。
そして、どこからか漂う神秘的な気配。

そんな少女の和風に整った顔を近づけられどぎまぎしてしまうのは仕方のないことだ、と自分に言い聞かせる。

「これ、落としましたよ…双神、想介くん？」

微笑を湛えたまま名前を呼ばれ、どぎまぎは驚きに変わる。

「な、なんでオレの名前…」

「落としたものがこれだったら、すぐわかります」

「え？…あ」

彼女が白い手に乗せていたのは、想介の生徒手帳だった。

どこか背伸びしたような表情をした自分の顔写真が目に入り、慌てて受け取り、しまう。

「あ、ありがとう。…君は？」

「んー、と。やっぱり名乗らなくちゃだめですか？」

顎に人差し指を当て、首をかしげるといふ可愛らしい、それでいてつい先ほど屋上で雨音がした動作をしながら彼女が言う。

「？…無理にとは言わないけど…お礼ぐらいしたいしさ」

名乗りたくないのか、名乗れないのか。

落ちていた生徒手帳を届けてくれたあたり、善人かつ想介に悪い印象は抱いていないはずなので、疑問に思う。

ただ生徒手帳に大切なものを幾つかしまっている想介としては、感謝はしてもないがしろにするつもりはないので、じゃあ、と言葉を続ける。

「こっちで勝手に呼んじゃうよ？ んー…撫子^{なでしこ}、とか」

雰囲気が大和撫子みたいだから、などとは言えない。

「ずいぶん斬新な結論ですねえ…まあ、いいです。想介くんの前ではあたしは『撫子』という事で」

ちょっと呆れた様子で言いながらも、後半は笑顔で言う。

「じゃあ…撫子、お礼がしたいんだけど、どっか行かないか？」

「あたしは構わないですけど…いいんですか？」

「…何が？」

どこか悪戯っぽく笑う彼女に聞き返す。

「彼女さんを放っておいて、ですよ」

「彼女？…雨音のこと？ なんで撫子がそれを」

「私が後ろにいるからじゃないかしら？」

「!？」

声がした方を振り向くと、今度こそ本当の待ち人が立っていた。
瞳に炎を湛えた雨音である。

「私を待ってる間にナンパなんて、良い御身分ね？」

「や、違う違う違う！撫子はオレの生徒手帳を届けてくれただけで、全然初対面だし、ただお礼をしようと…」

「初対面なのにもう下の名前を呼んでるんだー」

…私の名前は呼ばないのに。

その呟きは小さすぎて想介には聞こえなかった。

「な、撫子っていうのはオレが付けたあだ名で、下の名前じゃないからな！」

「へえ、もうあだ名をつけるほど仲がいいんだー」

「そう聞こえたのかもしれないけど意味が全然違う！」

どんどん泥沼にはまっていくのが分かってても想介にはどうする事も出来ず、店の前で断末魔が響いた。

「…ふう」

風呂から上がった想介は小さな溜息をつく。
結局あの後、撫子に自分の携帯の連絡先を書いたメモを押しつけて怒る雨音を宥めに行ったのだ。

リビングに行くと、姉…心こころがテレビを見ていた。

想介より先に風呂に入ったので恰好はパジャマ、髪は解いている。

「あ、想介…この番組面白いよー。この辺で収録してるらしいし」

口調も容姿も幼いの心の説明に、あー、とだるく頷く。

「小原達が言ってたなあ…」

「可愛い女の子も出てるみたいだし、見てみなよ」

「んー」

想介が心の隣に腰を下ろすと、そこでちょうどCMが終わる。

「あっ!？」

「どしたの？」

「この女の子…」

「あ、この子？可愛いよねー。でもこの子が零能力者なんだってー」

姉ちゃん、字違う。とも言えない程想介は驚いた。

すごいよねー、と他人事で言う心の言葉に想介は反応できなかった。

TVの中で引きしまった表情をしていたのは、つい数時間前に出会った撫子だった。

第4話 廃病院にて

翌日の朝。

「……………」

「双神くん？」

「……………」

「起きてるの？」

「んがっ!?!…あ、ごめん、ぼーつとしてた」

後頭部に手痛い一撃を喰い、悶絶しながらも素直に謝罪する。

「昨日の番組見たでしょ？」

唐突に雨音が聞く。

「あ、うん…。撫子の事だろ？」

「それはキミの付けたあだ名でしょ。本名は…」

「月見里美桜^{つきみさくら}」

想介の言葉に、雨音は「らしいわね」と頷く。

「美少女霊能力者…」

そう呟いた雨音がこちらを見る。

「じゃなくて、思念使い…だろ？」

「当たり前」

雨音が悪戯っぽく微笑む。

「で…どう見えた？」

「あ、ああ…雨音がオレに見せてくれたやつを数段レベルアップさせたような感じ…かな」

表情を改めた雨音に倣いながら言う。

「むっ」

不機嫌になる雨音。

「ど、どしたの？」

「…何でもないわよ。…どっちにしても私にはできない事だしね」

後半を小さな声で言う雨音に、想介は改めて撫子…いや、美桜のすごさを考える。

彼女の訪れた廃病院は異常に老朽化していて、番組の途中に一部が倒壊したのだ。

彼女は自らや、周りのスタッフの上に崩れ落ちる瓦礫の全てを、

指一本触れずに止めて見せた。

けが人はゼロ。美桜には惜しめない拍手が送られていたが、その時の彼女の表情は想介と話していた時とは違い、どこか上の空で崩れ落ちた部分の上を睨んでいた。

「でもさ、あの崩れ方、どこかおかしいと思わなかった？」

「く、崩れ方？そんなの見てる余裕無いって。心臓が止まりそうでそれどころじゃなかったよ」

「……はあ。あれね、人為的なものよ」

呆れ顔で小さく溜息をついてから雨音が言う。

「そんな顔すんなよ……。って、じ、人為的!？」

言葉の重大さに一拍遅れて気付き、声を上げる。

「そ、言葉の綾だけだね。起こしたのは幻人^{イド}」

「……またイドかよ……。やったのは撫子のイドなのか？」

「違う……と思う」

「思う？」

歯切れの悪い雨音の言葉に、疑問符を浮かべる。

「あのねえ、あそこは廃病院なのよ？死にたくない死にたくないって想いで生まれた幻人がどれだけ溜まって、それから後の人間の

欲や何かでいくらでも闇堕ち^{ネガ落ち}した幻人が生まれてると思うの？」

「な、なるほど…」

雨音の剣幕に思わず一步退く。

「とりあえず、学校サボって…」

「雨音、これ以上のサボりはマズイ」

思わず反射的に止める。

「それに、そういうことなら撫子のイドである可能性も薄いつてことだろ？学校終わってからでも充分間に合うって」

そしてうーん…と唸りながら悩む雨音を説き伏せてなんとか授業を受けさせた。

放課後、件の廃病院前。

「うわぁ、雰囲気あるなあ…何か出そうだ」

「何言ってるのキミは。正体なら知ってるでしょ。さ、入るわよ」

「え、でも…」

目の前にある『KEEP OUT』のテープを横目に見ながら口ごもる。

「今更こんなの気にしてどうするのよ、キミの言う通り学校サボらなかつたんだから早くしなさい」

「…了解しました」

———はあ、厄日だ。

内心で呟きながら黄色のテープを雨音に続いてくぐる。

人目を気にしながらもさっさと中に入ると、内部は完全な暗闇だった。

「……………雨音、明かりは」

「持ってるわ」

一度家に帰った訳でもないのに、彼女の薄い鞆からはペンライトが出てくる。

ペンライトとは言ってもやたらと強力で、多少の不足感はあるものの、想介達の足元をしっかりと照らした。

「…双神くん、この病院が潰れた理由を知ってる?」

歩き始めてからしばらくして二階へ上った所で、雨音が表情を崩さないまま立ち止まって言った。

「理由?…知らない」

「入院した人達が異常な勢いで原因不明の死を遂げたかららしいのよ」

「!」

息をのむ。

———それって、それって。

その続きは口から零れた。

「イド…?」

雨音が小さく頷く。

「だと思うわ…こいつみたいなの、ね!」

言うが早いのか、雨音はどこからともなく拳大の球体を取り出すと、前方に投擲した。

がしゃん!と大きな音を立てて碎けた球体からは大量の水が溢れ、それはすぐさま幾つもの槍に形を変えて闇に突き刺さった。

「グ、ウウ」

「!」

誰も、何も居ないはずの暗闇を凝視しながら身構える。

「…駄目か…」

「え？」

雨音の言葉に思わずそちらを見る。

「あてずっぽだもの。当たったのも精々二、三本ね」

「そ、そうなのか」

うん、と頷く雨音に想介は警戒を解かないまま慄く。

彼女が水を使って作った槍は視認できるだけで十は超えている。

——それを、避けるなんて。

「！双神くん！！」

「！！」

そこまで考えたところで雨音の声を聞いて、反射的に横に転がる。
バカァン！なんて冗談のような音がして、つい今まで想介の居た
ところに大穴が穿たれる。

「げ…」

「ち…だが…見えるか…？」

雨音のものとも想介のものとも似ても似つかない低い声が悔しうに言う。

雨音が急いでライトを向けたときには、質量を持った闇が退くところが僅かに照らされただけだった。

「く…双神くん、こっちへ！」

「お、おう！」

慌てて雨音の傍に寄る。

「……ま、双神くんは見てて」

雨音は小さく微笑むと、スカートの下から、正しくはそこに装備した小瓶から前回とは異なる形の水の剣を引き抜いた。

その形は、レイピア。

様になった構えをとると、想介の間後ろに向かって二度の斬り払いと一度の突きを繰り出した。

がきん、がきん、と二度何かに当たる音がして大きなものが退く気配があった。

「ギ、ギ…マタ、タイジヤ…」

「「え!？」」

雨音と想介は同時に声を上げる。

それはさっき聞いたかすれた低い声とは違うものだったからだ。

歪んでいたが、確かに同年代の少女のもの。

「まさか、撫子の…」

「そんなはずないわ！彼女は昨日ちゃんと番組を終えたもの！」

雨音が大きな声で否定したところで、今度は雨音の前方から何か
が飛来する。

「つく！！」

がきんがきんがきん、と再び斬り結び始める雨音を背にしながら、
想介は自らを襲ったものを見る。

僅かに目が慣れてきた時に、再び伸びてきた闇の腕を必死で避ける。

「くそ…またなのか…」

———またオレは何もできないのか。

二度三度と避けたところで姿勢を崩され、躓く。

「しまっ…」

「そのまま前に転がって！！」

「！！」

聞こえた声に、反射的に従う。

そこで、ぐしゃぐしゃぐしゃ、と飛来した何かが雨音と想介、二人の相対する幻人を貫く。

「が!？」

「ギイイイ!？」

「逃がさない!!」

声を上げ、追撃を放つのは雨音ではない。
良く見れば、彼女が放ったのは瓦礫だ。

彼女の追撃から二つの影が逃れて闇に消える。

「…逃げられましたか…」

彼女は小さく溜息をつくど、こちらに駆け寄る。

「大丈夫ですか?…どうして立ち入り禁止なのにこんな所に……
って、想介、くん？」

「え…」

彼女自身が持つ懐中電灯で姿が浮かぶ。

「撫子…?」

「なんで、想介くんがここに…」

浮かび上がったのは、黒髪に、全身黒の、しかしながら女の子らしい服装。

そして和風に整った顔。

撫子改め、月見里美桜だった。

第5話 撫子の幻人

「そう、ですか。あれは幻人^{イド}って言うんですね」

とりあえず場所を安全そうな所に移動し、雨音の簡単な説明を終えた所で美桜は言った。

「うん。…月見里さんは幻人を知らなかったのね？それならどうしてここに？」

「それは…収録のときに…何というか、その」

上手く言えませんが、と前置きして呟く。

「あたしを…みました」

だから、です。と呟きが消え入る。

「……………はあ」

やっぱりね、と雨音から溜息が洩れる。

「…てことは、現れたのは昨日という事？もしそうならいくらなんでも闇落ち^{ネガ落ち}が早すぎる…」

「あの」

「何？」

ぶつぶつ言い始めた雨音に美桜が声をかける。

「…あたし、この病院が廃病院になる前、ここにいたんです。入院してました」

今は良くなってますけど、小児がんで。
そう付け加える。

「それ、いつの話？」

「あたしが生まれてから小学校入学直前までです」

にこ、と笑顔を浮かべるが、想介はそこに湛えられた痛みを垣間見た気がして思わず目を僅かに逸らす。

「…入学直前なら、自我は充分できてる。しかもそういう理由なら幻人が出来てもおかしくないわね…」

「そんな！じゃあ」

声を上げたのは想介。自分の考えを否定したいが、口が勝手に動く。

「ここを廃病院にするほど、人を殺したのは…撫子のイドなのか…？」

声が震える、語尾が不自然に揺らぐ。
美桜も傍で息を呑んだ。

「違うわ」

即答する。

そして想介達がもう一度口を開く前に雨音が続ける。

「幻人^{イド}はね、まず自分の本体を殺す。『自分』を手に入れるために。だからこそ、これまであの病院で人を殺したのはもう一方。…悪く考えれば『その他』ね」

想介がほ、と溜息をつこうとしたところで、またしても雨音が遮る。

「だめよ」

と。

「自分の幻人が殺していないことに安心したなら、それは同罪よ。守れなかった事を後悔しなさい。

その力を使えるようになったのがいつかは知らないけれど…力を持つ者には『義務』と『責任』が付きまとうのよ」

「……………そう、ですな」

美桜が辛そうに目を細めながらも頷く。

想介は自分に向けられた言葉ではないと分かった後も緊張が解けなかった。

「…けど、あるとき…それから、さつき。貴女の行動を私は尊敬するわ。恰好よかった」

力を抜いた笑顔で言った雨音の顔を見て美桜が小さく「ありがと

うございます」と呟く。

その笑顔があまりに泣きそうに見えて、想介は思わず一歩踏み出して美桜の頭に手を置く。

「!？」

「そ、想介くん？」

雨音が息を呑み、美桜が声を上げる。

そのままなでなでと動かす。

そうしながら、呟く。

いいだろ、と。

「泣いても、いいと思う」

「!！」

そのままなでなでと続けると、ぶんぶんぶん、と美桜が大きく首を横に振る。

「だめ、です…まだ、あたしは、まだ…」

想介の視点は弾かれてしまった手ではなく、美桜の頬に向く。
一筋の雫。

撫子、それ、と口に出してしまいそうになった瞬間。

「なにを、やっとなるか——っ!！」

「ぐはっ!？」

後頭部に凄まじい衝撃を感じた直後に前のめりに頭から地面に突っ込む。

「ぐおおおお………」

「自業自得よ、女の子を泣かすなんて」

「ち、ちが……ごか……」

「誤解?何が誤解なの……ああ、わかった。あと五回ね、了解したわ」

「ええー……」

「ごす、ごす、ごす、ごす、ごす、ごす、と。」

横たわる想介に対する雨音のチョップは的確に五回を記録した。そして続ける。

「……………さて、戦闘開始ね」

「え!？」

「……………」

こくり、と美桜が頷くのを見て更に混乱した瞬間に、ドドドドドン!…と影でできた槍が想介たちの逃げ込んだ個室を貫いた。

「な…」

「止まらないで!!」

「…ッ！」

雨音の言葉に必死で横に逃げる。

そうした瞬間、水の槍がばらまかれた。

自ら投げた三つの水風船を水鉄砲で撃ち抜き、無数の槍を作り出す。

部屋を貫いた影をそれで崩すと、雨音は絶妙のタイミングで美桜が壊したドアの前に立ち、手に持った二丁の水鉄砲を乱射する。

水のレーザーではなく、弾丸。

部屋を貫いた影の本体は水に削られながら数歩引き、今度は腕を振るってくる。

「……………そこっ!!」

雨音の後ろから美桜が手を振る。

それだけで幻人の腕は弾かれ、二度目の一撃で廊下の壁にめり込まれる。

「……………で、ばん…だ」

幻人が呻く。その瞬間。

びぎぎぎぎ。

そんな形容しがたい音が響いた。

想介の、頭上から。

「想介くん!!!!」

「双神くん!!!!」

雨音と美桜の言葉に、想介は駆けだすが、その時点で視界の上半分は瓦礫に覆われていた。

「あ、れ…?」

想介の体のどこにも、痛みは無かった。

「はあ、はあ、はあ……」

「な、撫子……な!？」

風を感じた。

想介の後ろには大穴が空いているのだから当然ではある。

瓦礫は全て外に叩き出されたようだった。

「な、撫子…」

ただただ、立っていることしかできなかった。

「よ、か、った。…よか、った。よかった、よう…」

切れ切れに眩きながら想介に近づき、抱きつく。

「ちよっ…」

甘い匂いが漂う。

「よかった…守れなかったかと、思った。…よかったよう…」

ぐすぐすと泣き始め、想介の肩に顔をうずめながら一緒に座りこんでしまう。

「な、撫子、敵が…」

そう言いながら上を見ると、そこにはもう一体の影——幻人がのぞいていた。

「……あれ、は」

黒く染まり、躊躇なく想介を、あるいは美桜を殺すために天井を落としたのは——やはり、美桜の幻人だった。

想介には、その表情が子供の泣き顔に見えた。

「撫子：あそこに、撫子の」

美桜は答えず、ただうずめたままの顔を弱弱しく振るだけだ。

「双神くん！そのままその子守ってて！！」

「わ、わかった！」

いつの間にか片方を水の剣レイピアに持ち替えた雨音が振り向かず言う。

「と、とりあえず立って」

相変わらず弱弱しく首を振るだけの美桜の背中に手を回して一緒に立ちあがる。

雨音は廊下に進入して闘っているらしく、ここからは音しか聞こえない。

———どうにかしないと…。

内心で呟き、ぐると首をめぐらせたところで、二つの音がする。

たし、という小さな音。

ぐちゃり、という寒気のする音。

「……………こんなの」

———どうにかできるのかよ。

想介の前に落ちて、あるいは降りてきたのは美桜の幻人と、もは

や醜悪としか言えない汚泥の塊だった。

美桜の幻人が隣にいるために、より大きく見える。

質量は美桜の3倍はあるだろう。

元が人の想い。

それを認めたくなんてない。

ぎり、と歯を噛みしめる。

「撫子、闘わなくていいからここで待ってて」

「や、やだっ」

子供の様に言う彼女に笑いかけるしかない自分に無力感を感じながら向かい合う。

「恰好良く、助けなくちゃな」

第6話 幻人に込められた想いは

びゅるり、とおぞましい音がした。

「————なっ!?!」

想介は声を上げる。

「…………ふ、む。ひさびさの…人間相手、だ。
こちら、も…らしくさせ、て、もらった」

想介に向かって途切れ途切れの枯れ、潰れた声を出したのは汚泥
だった幻人^{イド}だ。

その汚泥は今、人の姿、否、それを模した姿に変わっている。
所々がひび割れ、闇を漏らしていてもその顔が整った顔立ちに見
えるのはその基になった人間の顔立ちがそうだったからか。

「…しか、し。まずは…お前、に、『完成』してもらわね、ばな」

その幻人は美桜の方を指差し、視線を美桜の幻人に向けながら言
う。

「殺、せ」

……………。

「……………!?!」

美桜の幻人はよろよろと言うのが適切な言い方であろう動作で首を横に振ったが、やがて真っ黒な右手を前に持ち上げた。

「がっ…!？」

それだけで想介の体は舞い上がる。

どうやら念動力で一撃を喰らわされたらしい。

「あ、あ…? そう、すけくん…?」

美桜が声を上げる。

無意識のように両手を想介に向ける。

いつものように、思い通りに想介の体はふわりと見えない手に受け止められる——はずだった。

「がふっ…」

「…え？」

想介にはその表情を確認する余裕もない。

美桜の幻人が同じ——想介には泣き顔にしか見えない——表情で持ち上げた右手を今度は手の平を下にして振り下ろしたからだ。

「くっ…!」

痛む鳩尾を無視して美桜に向かって跳ぶ。

それが美桜の体のどこかも分からず抱き込んで一緒に転がる。

「はっ…はっ…」

肩で息をしながら再び顔を上げる。

「そうすけ、くん…ちから、が……。力が使えなく…」

「わかってる。大丈夫だ」

根拠は何もないのに反射的にそう答える。

想介も気付いていた。

想介を助けようとした彼女の力が働いていないことに。

「で、でも…力が使えないあたしなんて」

「大丈夫だ」

もう一度呟くと、抱きかかえていた力を一瞬だけ強めてから手を離して、ゆっくり立ち上がる。

一歩踏み出した想介に、不意に重みがのしかかった。

「ぐ…」

みしい、と足が地面にめり込む。

関節が悲鳴を上げる。

体中が軋む。

「なんでだ…」

それでも思わず呟いていた。

その言葉を聞いてか、美桜の幻人が目を僅かに見開いた――――
ように見えた。

途端に視界が揺らぐ。

「あ…あれ…」

頭がずきずきと痛み、それが攻撃を受けたからだ気付くのに数秒かけてしまう。

「そうすけくん!!」

仰向けに数メートル吹き飛ばされたようだが、またそれを無視して立ち上がる。

「なんでだ…」

再び呟く。

「なんで…そんな顔してるんだよ…」

「!!」

今度こそ見間違えようなく美桜の幻人が目を見開いた。
そして再び、見えざる攻撃が想介を襲った。

「が…ぐ」

ぐらぐらとする頭のこめかみを手で押さえながらまた立ち上がる。

「も、もうやめ——」

「やめろなんて言わないでくれよな、撫子」

美桜の言葉を遮って言う。

「オレには見える。」

あいつは泣いてるんだ」

このままにしといちゃ、いけない。

体中から嫌な音をさせながら、しかし今度は向かってくる攻撃に押し戻されることなく。

想介は美桜の幻人にたどり着いた。

上がらない右手の代わりに左手でその頬を撫でる。

「オレのイドと、違うような気がするんだよな、お前」

想介の幻人は明確な殺意を抱いていた。

でも彼女の幻人にはそれが無い。

わけもわからないまま流されようとしている。

そんな気がした。

「多分、さ。」

オレのイドはオレの色んな感情の寄せ集めだったからじゃないかと思うんだ」

それがイドの「当然」らしいからな、と小さく笑いかける。

「でもお前は違う。それは「当然」だけど、誰よりも撫子の中で強かった感情…。

きっと、お前は「生きたい」って感情から生まれたんじゃないかと…思うんだよ」

———だから。

虚ろな光の様な目を真っすぐ見つめて言った。

「こんなところで人を殺す手伝いをするのがお前だなんて、あり得ないんだよ。

助けてくれて叫んだらいいんだ。生きたいって気持ちだったんだから。

そしたら俺が助けてやる。

だから、言え。言ってくれ。

そんな顔で泣いてるくらいなら、助けてって叫んでくれ!!」

「———!!」

光が、その場を包んだ。

第7話 一緒に

目を開かなくてもわかった。

まるで温かい光の中にいるような感覚。

目の前の自分の体が崩れ落ちるのを感じながらも、意識は伝わってくる美桜の感情にだけ向いていた。

——いきたい。

——生きたい、生きていききたいよ——

そんな気持ちに答える方法を、教えられなくても無意識に理解する。

「お前は、生きてるよ。ここに、この場所に！ お前は生きてるんだ、オレが証明する！

だから、この力、お前の生きたいって想いを————オレに貸してくれ！！

オレが…美桜おまえを助けてやる！！！！」

傲慢な言葉だ、と頭の片隅で思った。

でも、そんなの関係ない、とより大きな想いが叫ぶ。

オレは、撫子を…美桜を助けられればそれでいいんだ、と。

そこで、無意識に体が動いた。

崩れ落ちそうな自分の体に僅かに手を触れ、速度をいなすようにしながら寝かせる。

この病院の床には何があるかわからないからという少しの危機感から来たものだが、そのおかげで想介は気付けた。

自分の視界の中で舞う美しい黒髪に。

と言っても、今は自分の髪なのだが。

「……なるほど、誰かのイドの力を借りるとこうなるのか」

なんとなく何が起きているか理解できた。

今の自分は美桜の幻人に憑依しているのだから、と。

しかし、想介の姿は美桜のものでも想介のものでもなかった。

確かに黒い長髪や顔立ちは少女めいた美桜のものだが、その力強い目の光や体格は想介のものだ。

そして今の想介の服装は幼い美桜の幻人の着ていたものと男子用の制服を足して二で割ったような代物だ。

恐らく、美桜の幻人と想介の間をとって、精神の中心である想介を示したのだ。

その証拠は普段の想介よりも低い背と華奢な身体つき、そしてそ

れでも男であると認識させるすらつとした体。

少女めいた少年、というのが一番わかりやすいだろう。

普段なら驚き、戸惑い、よくわからない行動を取るであろう想介も今は落ち着いていた。

やるべき事がわかっていたからだろう。

「…なん、だ…と…？」

ぐじゅる、という音とともにそんな声がもう一人の方から漏れた。想介は息を深く吸い込みつつ肩程度の高さで右拳を引き絞る。

「オレは…お前を、許さないぞっ!!」

自分の幻人に憑依したときには感じなかったこと。

それを無意識のうちに想像イメージしながら拳を前方に撃ち出した。

「…!!？」

目の前の幻人は何かを言う暇も無く壁に叩きつけられた。

その力は見間違テレキネシスいようも無く美桜の振るった念動力だった。

ばちゃっ、という音は幻人が闇そのもので構成されていることを示しているような気がした。

壁に張り付いた汚泥とかしたそれは地面に滴り落ちながら再びひともどきの形を生成していく。

身の毛もよだつようなその光景だが、想介の心にあったのは怒り

だった。

目の前の人の形を模した幻人に対する怒り。
その想いはそのまま口から言葉となって飛び出す。

「この力はな、美桜が生きるために、生きたいって願った結果なんだよ！」

自分が生きることができたから、他の誰かを生かすための力だ！」

想介の力は純粹な想いを形にする力。

美桜の力は純粹な願いを形にした力。

全く違うようでいてとても似ている力。

だからとても腹が立つのだ。

「そんな綺麗な力を！」

自分が生きたいって願って助けられた分、生きたいって願う誰かを助けるためのちからを！」

こんな闇の中で、人を殺させるために使わせるな！！！」

足の裏が爆発したような感覚。

念動力を使って5メートルは離れた幻人の元まで跳躍した想介は

地面を踏み抜く勢いの震脚（もどき）をしながら拳をほとんど形成の終えていた幻人の鳩尾あたりに叩き込んだ。

その拳は前回自分の幻人に憑依したときよりずっと華奢で小さなものだが、念動力を付加されたその威力は前のそれをはるかに上回る。

再度、ばちゃっ、という音と共に今度は幻人が上下に分断された。

だが、想介はぎり、と奥歯を噛み合わせた。

こいつは消えていない、堪えていない。

この廃墟に蓄積された闇の大部分はこいつにあるんだと思った。半歩下がって撒き散らされる汚泥を躲しながら美桜がしていたように開いた左手を薙ぐ。

それだけで想介に降りかかる途中で槍に変わろうとしていた汚泥は薙ぎ払われる。

そうしながらも、半歩退いてしまった自分を叱咤するように右手で念動力を宿した拳を作り、左手は開いたまま複雑な念動力で防御、攻撃の両方をこなす。

まるで舞うように。

長い黒髪を舞わせ、拳を舞わせ、見えない盾や剣を舞わせる。

想介にもう少し余裕があれば、美桜が息を呑んだ事に気が付いたかもしれない。

それほどその戦い、いや、戦舞は美しかった。

一度として同じ動きを繰り返す事のない戦舞を通して、想介は少しずつ幻人の？を削り、否、浄化していく。

その想介の後ろで美桜はいつしか口元を覆って涙を流していた。

自分の力はこんな風に美しいものだったのか、と。

同時に思う。

……………想介くんが羨ましい。

……………もう少し早く彼と出逢えていたら…。

……………あたしも、変わったのかな…。

涙を拭う事もせず右手を伸ばす。

すぐにその手が力を失って落ちたのは自分が思念力を失っている事を思い出したから。

「あたしは……」

無力だ。

そう呟こうとした美桜の前で、一際大きな汚泥の槍が想介に放たれる。

美桜は息を吞むが、想介は退くことなく開いた右手でその先端を掴み取った。

ぴし。

ぴしぴし…びし。

そんな小さな音に続いたのは破砕音。

巨大な闇の槍は想介が握った所からひびが広がり、砕け散った。続けて想介は砕いた闇から顔を右手で庇いながら手刀の形にした左手で空を薙いだ。

再び上下に分断された幻人を見ながら、想介は後ろに跳んだ。

「え…？」

行き先は美桜の隣。

「美桜、力を貸してくれ」

真っ直ぐに目を見据えて言う。

「で、でも…あれはもう」

「まだ終わりじゃない」

想介は言い切った。

「まだ終わってないんだ。終われないんだ、あいつは、このままじや」

戦っててわかった。

そう呟いてから幻人に視線を戻してから更に続ける。

「あいつはこの前オレが倒した奴とは違うんだ。多分、ここに集まった患者さんのよくないものも取り込んでるんだ、きつと。」

不安とか、恐怖とか……。

兎に角、美桜の力を借りたオレじゃ駄目なんだ。生きたいってことを思ってた美桜自身の想いちからがないと、あれは消せない、消してやれない」

「……………」

美桜の返答は言葉も力も無い否定だった。

「あたしは……あたしには…無理だよ……」

想介くんみたいには、なれないよ…。

呟く美桜を想介は手をぎゅっと握ることで励ます。

普段の想介なら考えられないような行動だったが、今は気にならない。

「ひとりじゃないんだ、美桜。オレだってひとりじゃ何もできない。今だって美桜の想いと力を借りてるだけなんだ。

だから、一人で無理なら一緒にやろう。

あいつを……解放してやろう」

手を握ったまま美桜を立ち上がらせる。

幻人は既に再生を終えて、想介達に向かって汚泥の槍を飛ばし始めている。

「美桜」

ほとんど想介に体重を預けている彼女を、その名前を呼ぶ事で支える。

「オレがいる、一人じゃない。

だから……あいつをお前のイドみたいこんな所にひとりにさせておいちゃいけない」

そんなの、悲しすぎるだろ。

そんな言葉に、ようやく美桜は想介に体を預けたままながらも右手を上げた。

「……そのまま、支えてて、くれる？」

想介は頷く。

美桜はそんな想介から伝わってくる鼓動に目を閉じて耳を傾けた。

それは、いつか遠い昔に聞いた憶えのあるそれよりも力強い。

どくん、どくん、どくん。

ゆっくりと瞼を開けると、美桜の右手に添うように想介の右腕も突き出されていた。

「……いくよ、想介くん」

「……うん」

次の瞬間、不可視の、それでいてとても清浄なちからが放たれた。

第8話 しがらまれちゃいます。

「は、初めまして！」

月見里やまなし 美桜です！ よろしくお願いします！」

少し顔を紅くして、それでも大きな声でクラスへの自己紹介をした美桜はとても好意的に受け止められたらしい。

程度で言えば、想介と雨音が話しかける隙も無い程。

あの廃病院での事が解決した翌日、かの有名な美少女霊能力者は電撃引退した。

理由は深くは語られておらず、そのインタビューをした者や、番組を見ていたものの印象に残ったのは、彼女の顔に浮かぶ晴れ晴れとした、それでいて悪戯っぽい微笑だったそうである。

月見里改め月見里つきみざい やまなし。

山が無ければ月見ができる、という由来を持つこの苗字も、有名であった時間（つまりは芸名として使っていた時間）が長い所為で、本来の呼び方で使われたのは久方振りのこと、と小さく笑ってみせたのは美桜。

彼女の笑顔に当てられた者たちの所為で、美桜に近づくのを躊躇したまま、その日の昼休み。

食事を終えた雨音と共に、想介は雨音と共に屋上にいた。

「……………すげえ良い顔してたなあ」

「そうね…。きっと、色々なものから解放されたんじゃないかしら」
ぽつりと言った想介に雨音が空を仰ぎながら言う。

「解放？」

「^{しがらみ}柵から。ちょっと羨ましい話ね」

「あ、雨音のことだってオレがなんとかしてやる！」

自嘲気味に言う雨音に、想介は思わず声を張り上げる。
返ってくるのは一瞬前の表情とは打って変わった年相応の笑み。

「勿論期待してるわ。まず私より強くなる事をね」

「ぐっ…」

言葉に詰まる。

結局今回も偶然に助けられたのだからぐうの音も出ないのだ。

「な、なあ」

「なあに？」

くすくすという笑いを隠そうともしない雨音に声を掛けるのは半分が恥ずかしさ故だが、もう半分は理由がある。

「美桜のこと、どうするんだ？」

そう言った瞬間に、僅かに雨音の眉が寄せられ、唇が尖る。

「…………名前で呼んでる」

「え？」

その小さすぎる呟きは想介の耳に届くことがない上に「なんでもないっ」という雨音の声に上書きされてしまう。

「どうする、っていうのは、あの子も私たちの仲間にするかどうかってこと？」

「えーと…」

「はっきりしなさいよ、男の子！」

よくわからないノリらしきもので背中を叩かれ、泡を喰いつつもしどろもどろに「ま、まあそんなところ」と答える。

それを見た雨音の反応は苦笑しながらのため息、というものだったが、すぐに表情を引き締める。

「逆に聞くけど、双神君はどうなの？」

「どうって…何が？」

「あの子——月見里さん^{やまなし}を、私たちに巻き込みたいのかって事よ」

そこまで言われてはつとする。

自分たちの仲間にする、というのは、美桜をあゝの汚泥のような『奴ら』と相對させる事に他ならない。

「私は別よ？　そもその根っこの理由があるんだから」

君は――と想介に向けて言いかけて顔を赤くする。

「ま、まああの約束は今も続いてるからねっ、忘れたりしたら死刑だから！」

人差し指を想介のほうに向けながらも、顔は明後日の方向に逸らしている雨音に、想介は思わず吹き出しそうになる。

主に、僅かに見える耳まで真っ赤になっている事が理由だ。

恥ずかしいなら言わなきゃいいのに、という呟きは運悪く聞こえてしまったようで、手刀が頭に落とされる。

そんな子供じみたやりとりを繰り返している途中で、すぐ目の前の扉ががちゃん、と鳴って二人を硬直させる。

特に見られて困る事をしていたわけではないが――やはり、オナノコと二人きりを目撃されるというのはやや抵抗感がある。

どちらにせよ逃げ道などないと諦めの感情を意識したところで、屋上への訪問者が顔だけを覗かせた。

「よし、ここなら……あ」

「え！？　み、美桜！？」

呟くように何事かを言った美桜は、すぐに想介の方をみると、小さく声をあげた。

続いて、その大和撫子と呼ぶに相応しい美貌が綻ぶ。

「ここにいたんですか。想介くん」

屋上の扉を後ろ手で音を立てないように閉め、両の手の平を合わせて少し上目遣いで言われた想介はどうすればいいか迷った末に「え、あ、うん…」とこれ以上ない程恰好悪い返事を返す。

だが、美桜は気にした様子もなくにこにこしながら「雨音さんもこんにちは」と会釈して見せる。

「こんにちは」

雨音が同じ様に挨拶を返したのを見ると、二人に歩み寄って想介の隣を指差す。

「ここ、いいですか？」

「……………」

「え、あ…も、勿論」

隣に座る少女の視線をひしひしと感じながらも、嫌がっているわけではないということを察した想介は頷く。

だが、微笑みを深くした美桜がそこに座ったときには凄まじいと言えるほどの居心地の悪さを感じる。

「……………」

「…………えーと！　そういえば美桜はどうしたんだ！？　オレか雨音に用でもあったのかっ!？」

二人に挟まれて数分後、雨音の視線という凶器の前に晒された想介は視線に操られるままに声を出す。

「……あ、想介くんの隣が居心地良くて忘れてましたっ」

雨音の視線が更に痛くなったのは言うまでもない。

「でも、想介くんだってひどいですよ」

「え、な、何が？」

「あたしがお礼言う前になくなっちゃうし、今日だって話しかけようと思って一生懸命探してたのにどこにもいないし…」

ぷくう、と頬を膨らませてから言ってみせるが、すぐに空気が抜けて目を伏せる。

「や、や！　ちょっとタイミングが悪かったただけだって！　オレも後で話そうと思ってたんだ！　美桜がみんなに馴染むのを邪魔しちゃまずいと思ってイタタタタ!!?」

妙な語尾は雨音が想介の腿を思い切り抓った所為。
しかも、想介が顔を向けた時にはすまし顔でつんと頤おとがを上に向けてるあたりが雨音らしい。

「…………とりあえず、だ。どうしたんだ？」

取り付く島もないことを認識すると、ちょっと恨みがましい視線を雨音に向けてから想介は改めて美桜に言う。

「はい。聞きたいことが」

「聞きたい事？」

表情を再び明るくした美桜にオウム返しに聞き返す。

はい、と頷いた美桜は表情を引き締める。

「二人はあんな風に：ずっと、ああいう——《^{イト}幻人》、でしたっけ？ ……それと戦ってるんですか？」

その言葉に、雨音と想介は顔を見合わせるが、アイコンタクトだけですぐに「あそこまで話しているのだから隠すのも無駄だろう」という結論に達する。

「ええ。と言っても双神君はまだ関わってきたばかりだけれど」

答えたのは雨音。

「そう、ですか」

美桜が考え込むように顎に手を当てる。

そして、決心したように二人の顔を見据える。

「あたしを、……うん、あたしに手伝わしてもらえませんか？ ち

からも戻りましたし、役に立てるはずです」

「だめだ」

「「え!?!」」

驚きの声を上げたのは二人の少女。

否定を示したのは想介。

雨音は不審にすら思う。

——さっきまで仲間にするかどうか聞いてきてたくせに。

「美桜の顔を見て思ったんだ。あんな奴らに関わる必要なんてない。美桜は自分の好きに生きてほしいと思う。」

雨音が言ってたしがらみからの解放って、そういうことだと思ってるんだ」

覗き込まれた恰好になっても目を逸らさずに言う。

「……………まあ、意見としては私もそれに賛成よ」

もうチーム——相棒と言っても構わないであろう自分の意見も聞かずに、というのは少し雨音の表情を不機嫌なものにしたが、それでも正しい判断だ、とは思おうのだろう。

「嫌です」

「え?。」

返って来たのは、想介と同じく否定。

「あたしはまだ何も想介くんに戻せてない。あたしが救われた分、想介くんを救うんです」

「盲目的ね。折角柵から解放されたのに」

「……かもしれませんね」

ぶつかった少女二人の間で火花が散る——かと思われたが、一瞬見せたネコ科めいた視線を、美桜はすぐに引っ込めた。

代わりに、先ほどまでと同じ大和撫子の微笑みが浮かぶ。

「じゃあこうしましょう」

「「?」」

今度は想介も含めて疑問符。

「あたしは柵から解放されました。でも、新しい柵ができた、ってことで」

「「?」?」」

二人はただ疑問符を深くするだけ。

その二人に向かって、美桜は更に笑みを深くする。

「想介くんにしがられちゃいます?」

「し、しがらまれ…なんだって？」

噛みそうになって、思わず聞き返す。

「^{しがら}柵まれる。絡まれる。囚われる、ですよ」

「んん？」

想介はわからず仕舞い。

「…………え」

対して雨音は気付いたようで、その顔からさっと血の気が引く。

「想介くんを好きになっちゃいました。ですから、一緒にいさせて下さい」

第9話 いたこと。

「それで？」

美桜が転校してきた翌日。

食事の後、改めて女子二人と屋上に集合したときに美桜が言った言葉だ。

「そ、それでって？」

「勿論、あの話です」

「あ、ああ。あの話な」

「……………」

妙な雰囲気を受け答えをする想介を無言で睨むのは雨音だ。

流石にあんな宣言コトがあれば仕方ないとは思っているらしいが、宣言をした当人はいつも通りでされた方は上の空。

流石に思う所がないわけではないらしい。

だが、その雨音の表情も続く美桜の言葉で気まずげなものに変わる。

「お二人は今までどうやって幻人を見つけてたんですか？」

「……………」

首を傾げつつ、想介は雨音に視線を送る。

「…………っ…」

目を逸らされる。

「……あれ？」

そんな二人の様子を見て困惑するのは美桜。

クエスチョンマークを浮かべた美桜に向かって、想介は一人で「オレは雨音に付いて来てるだけだから！」と捲し立てる。

自分を好いてくれている（かもしれない）女の子に恰好悪い所を見られたくはないという想いから出た言葉だったが、もう一人には逆効果である。

「……悪かったわね、無策で！」

ふん、と鼻を鳴らす雨音と、それを見てウロウロするばかりの想介。

思わずくすりと笑みを漏らした美桜に、雨音は「…………く」と呻く。

「あはは、ごめんなさい」

「……いいわよ別に。そこのヒトの言う通りだから」

「全力でごめんなさい」

そこのヒト呼ばわりは堪えたらしく、土下座する勢いの想介を見て、美桜はもう一度わずかに笑みを漏らした後に咳払いで場を押さ

える。

「と、とりあえずは情報収集とかではどうですか？」

二人に見つめられたからか、少し朱の差す頬の美桜が言う。

「…私だってそこまで無策じゃないわよ」

おお、と声を漏らした想介を睨んでおきながら、雨音は四つ折りにされた紙を差し出す。

「……双神くんは見てもわかんないわ」

「……はい」

項垂れる想介に笑いを――苦笑ではあったが――向けつつ、美桜がそれを受け取って広げる。

まだきつい視線を向けてくる雨音にビクつきながらも目をやると、そこに描いてあったのは地図。

「しかもこれ…この辺の…」

「そこまで広く様子を見たりはできないからね。放課後とか休日一人で行ける場所だけ」

言いながら地図をなぞる。

「……………これ、もしかして」

雨音がなぞった辺りを見て、美桜が声を上げる。
そこにあるのは赤いインクで書かれた×印。

「そ。そこには幻人^{イド}がいた」

いた。

つまりは――。

「倒した、のか」

「一人でも人を殺させるわけにはいかないから、ね」

残りの×印をなぞりながら――数は両手で数えられる程度だが――
淡々というその表情に晴れやかなものはない。

「……お疲れ様です。きつとみんな、感謝してますよ」

「……別に」

にこっと笑いかけた美桜にもすげない答えが返ってくるが、逸ら
された顔は少し赤く染まっていた。

「……あたしも状況的には同じ様な感じですけど――」

「じよ、状況って？」

蚊帳の外になっていた想介が捻じ込むように言葉を挟む。

「あたしのつい一昨日までの職業を忘れましたか？」

忘れるわけではない。

ニュースでもまだ取り上げているところは多くある。

そんな風に考えた想介を見透かしたように、ふっと視線を送ってから続ける。

「このあたりで最有力——尤もあれはホンモノでしたけど——だったのがあの病院です」

「あ、ああ…」

「想介くんしがらに柵しがらまれたあの病院です」

「あ、ああ……」

気まずげに雨音に視線を送った想介に、にこ、と深い笑みを送っておいて更に言う。

「でも、人が近づいたら本当に危ないって意味で撮影に行くのを却下された場所、それから不確かであるかわからないって所が残ります」

「それ、本当!？」

ずん、と雨音が身を乗り出す。

顔がかなりの距離まで近づいても動じる様子のない美桜が、一つ頷いてから「結花ちゃんは」と口を開いたところで、残り二人が「ユカちゃん!？」と声を上げる。

「…？ ユカにゃんの方が良いですか？」

「却下あっ！」

すぱん、と両断する雨音。

「だ、大体何でいきなり名前なのよ…」

「友達だからですよ？」

当然のように言う美桜に雨音が動きを止める。

「どうしたんですか？ 友達がいなくてもないでしょうに」

ですよ？ と首を傾げるが、美桜の予想とは裏腹な様子で雨音はぶつぶつと何かを言う。

「……………いわ」

「ふえ？」

「生まれてこの方、友達がいたことなんてないわよ！」

「「！！」」

衝撃の告白である。

確かに雨音は教室でも誰かと話しているのは見た事がないなあ、と思わず考え込む想介だったが、美桜は素直に引いていた。

「……え、えと。そ、そうだ！ 想介くんはどうなんですか？ 友達ですよ？」

流石と言うべき、なんだろうなあ…。

芸能界を渡って来た元美少女霊能力者がすぐに浮かべたその笑みを見てそんな感想を抱きつつも、想介は雨音の答えを待つ。

正直、雨音の事は戦う理由は知っていてもそれ以外は知らないのだ。

どう思われているかも勿論知らない。

もちろん、知りたい。

「あ、う……それはその…」

何故か顔を真っ赤に染める雨音の顔を覗き込む形になるが、雨音はただおろおろと美桜と想介の顔の間で視線を往復させる。

「あ…？」

美桜は心底、心底楽しそうな笑顔を浮かべた。

花が綻ぶというより、狂い咲きにそれは見えた。

「恋人同士？」

言葉も狂っていた。

「……………」

想介はただただ凍りついた。

雨音は――。

「や、や、ややや――」

言うまでも無く。

「……………」

「……………」

逃亡した。

「……………美桜…」

後のことを考え、げんなりした様子の想介が言う。

「や、予想外ですよ？ 流石に」

苦笑を浮かべてはいるが、その顔は引き攣っている。
想介としても、その言葉には同感だった。

意外、とも言えないだろうと思いながら天を仰ぐ。
仰天だった。

自分ひとりが雨音と一緒にいては、絶対に見られなかったであろう光景でもあるから。
からかうなどありえない（命の危機的な意味で）。

雨音にとって良い刺激なのか、悪いのかは置いておくとすると、美桜の存在は二人にとってありがたいよなあ、と思う。

「やだなあ、照れちゃいますよっ」

「痛!？」

美桜がバンバンと想介の背中を叩く。

「な、何故…」

ここで不満を口にできないのはヘタレだからではない…と、思いたい。

そんなことを考えた想介に向かって美桜が言う。

「口に出してましたよ? あたしの存在がありがたいって」

「マジで!？」

「まじです」

その頬が赤くなっているのは照れ臭いせいだろうか、と推測。褒められることなんて、いくらでもあるだろうに、というのは今度こそ心の中にだけ留めた。

第10話 伏見稲荷（偽） 1

「こ、これは……」

ごくり、と少し硬くなった唾を飲み込む。

「さ、流石に雰囲気あるわね……」

動揺に隣の雨音も腰を引きつつ言う。

「どうしたんですか？」

一人だけ動揺も緊張もしていないのはこの三人の中でもその手の話に一番弱いように見える美桜だ。

そこには単純かつ明快な理由があるのだが、まずは雨音と想介の腰が引けている理由だろう。

捜査、である。

想介達の街から電車を使って20分ほどのところにある山。

神社仏閣の類を頂に構えるその大して高くもない山が「いるかどうかわからない場所」である。

その入り口。

比べるのも失礼とさえ言えるが、イメージとしては伏見稲荷大社が近いだろうか。

因みに三人が三人とも「森の中に入れる恰好」である。

「…………なあ美桜」

「はい？」

「何で平気なんだ？」

先を指差しつつ言う。

「撮影で慣れちゃいました」

「……………」

単純明快。

美少女霊能力者は伊達ではないのである。

閑話休題。

彼の伏見稻荷大社は数多の鳥居^かを有する。

ただ、頭上を覆い隠すものが何もない彼の場所とは異なり、ここは鳥居よりも数メートル弱高い木が生い茂っているのである。

これならば、階段に並ぶ鳥居の数が精々三分の一であろうとも暗くなるに決まっている。

暗い。

というよりも、闇い。

想介の感想はそのようなものだった。

尤も闇いのは時刻が夜に近い黄昏であることも理由の一つなのであろうが。

あるいは、人が訪れた形跡が全くない——生い茂った木が放置されていることから——のもそうなのかもしれない。

「……どうしてここは候補から外れたの？」

深呼吸一つの後に何時もの気難しそうな表情を取り戻した雨音が言う。

候補——つまりは、美桜が『天才美少女霊能力者』として訪れる候補である。

その『天才美少女霊能力者』は、やはりいつもと同じ微笑を浮かべつつ首を横に振った。

「候補から外れたわけじゃなくて、ただ後回しにされただけですよ」

そして、あたしがやめちゃいましたからもう誰かが訪れることはないんでしょうけどね、と付け足す。

「後回し？」

「ここ、昼間でも光が全く差しこまないらしいんです」

先ほど想介がそうしたように入り口を指差す。

そこは空、というより虚うつろに繋がるような黒が口を開けているだけだ。

「……それ」

「はい、それもそうだったのが数年前からってことですからおかしい
っという結論に」

「だったら尚更——」

怪訝に思った想介が一瞬考え込んだ雨音の代わりに声を出す。

「色々大変だったみたいですよ？」

首を傾げつつ恐ろしい一言。

「そ、それって」

「はい」

ごくり、と。

再び生唾を飲み込む。

「足元は全然見えないから躓くし落とすしで機材がいっぱい壊れた
ーって愚痴られちゃいました」

「そっちなよ！」

大人の事情であつた。

因みに美桜からピンマイクは云十万だのと話をされて想介が驚くのは少し後の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4882p/>

『フタガミ☆ダブル』

2011年11月15日00時33分発行